資料 3

金川 構成員 提出資料

リスクコミュニケーター養成プログラムの設計
ー農林水産省を例として：(1) 設計思想とプログラムの内容ー

○木下冨雄（甲子園大学）・吉野絹子（神戸学院大学）・山田由紀子（農林水産省食品総合研究所）・金川智恵（甲子園大学）・福井　誠　（甲子園大学）・竹西亜古（甲子園大学）

Design of training program for a skillful risk communicator ― A case of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries : (1) Design policy and the contents of the program

Tomio Kinoshita(Koshien University), Kinuko Yoshino(Kobe Gakuin University), Yukiko Yamada (Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries), Chie Kanagawa(Koshien University), Makoto Fukui (Koshien University), Ako Takenishi(Koshien University)

Abstract : The purpose of this study is to introduce a training program for a skillful risk communicator in the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries. The program divides into two parts. One is a lecture on philosophy, history, method, and effects of risk communication, and the other is a practice of risk communication . The skill of risk communication during the practice is measured and fed back to the participants. The most important design policy of the program is how to win public confidence in the Ministry through risk communication . After the program, we explain and ask for an opportunity to help the executive of the Ministry to understand the purpose of the program. It helps a lot to strengthen an organization norm in fairness in the Ministry.

Keyword : Risk communication, Training program, Design policy, Contents of program, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

Ⅰ　はじめに

私たちは、甲子園大学所属の社会心理学者を中心として、リスクマネジメントに関する学内NPOを立ち上げている。そこで扱ってきた主な業務は次のようなものである。

①リスクコミュニケーションのトレーニング
②リスク認知の測定や国際比較
③群衆の制御システム構築
④風評被害の制御システム構築
⑤地震災害時における社会的葛藤の予測と制御
⑥学校のセキュリティ対策
⑦大学病院のリスク管理
⑧企業におけるヒューマンエラーの可能性とその制御
⑨企業倫理の向上と内部告発

⑩リーダーシップのトレーニング
⑪社会的賢さのトレーニング

これらの例で分かるように、扱うリスクの種類は、社会心理学に関わるものが中心となっている。この中でも特に得意とする領域は①②③④⑤⑩⑪などであり、政府、地方自治体、企業、教育機関などの要請を受けて、研修や企画や顧問など、コンサルタント的業務を行ってきた。

このうち、一部ではあるがすでにリスク学会で内容を報告したのは②③⑤であり、それ以外の業務内容は、他の学会や論文で発表されている。今回発表するのは①の業務である。

II　農林水産省におけるリスクコミュニケーター養成の背景

(1) 食の安全と安心に向けての政府の動き

2001 年 9 月に、わが国で始めて BSE の発生が報告された。この問題は行政の対応のまずさなどから国民の食に対する不信を招き、これまでの食の安全確保のあり方に大きな課題を投げかけることになる。その後も食品の偽装表示の発覚、輸入野菜からの残留農薬の検出、堺市で発生した O157 事件の裁判など、食の安全をめぐる問題が相次いで起こったことは記憶に新しい（内閣府食品安全委員会・厚生労働省・農林水産省, 2003)。

このような問題を受けて、厚生労働大臣と農林水産大臣の私的諮問機関が、2003 年 4 月に、食品の安全性確保に関する基本原則を確立するための新しい法律の制定や、既存の食品関連法の抜本的見直しをすると共に、独立性・一貫性を保ち、リスク評価機能を中心としながら各省庁との調整機能を持つ、新たな食品安全行政機関の設置などを盛り込んだ報告書を取りまとめた。

この報告書の提言を受けて関係閣僚会議が設置され、そこでの検討をもとに「食品安全基本法案」が第 156 回国会に提出、2003 年 5 月 16 日に可決・成立した。その基本理念の中には、食品健康影響評価を実施すること（リスク評価)、国民の食生活の状況等を考慮するとともに、食品健康影響評価結果に基づいた施策を策定すること（リスク管理)、国民に対し情報の提供、意見を述べる機会を付与するとともに、関係者相互間の情報及び意見交換を図ること（リスクコミュニケーション）が含まれている。これらの関係を示したのが図 1 である。

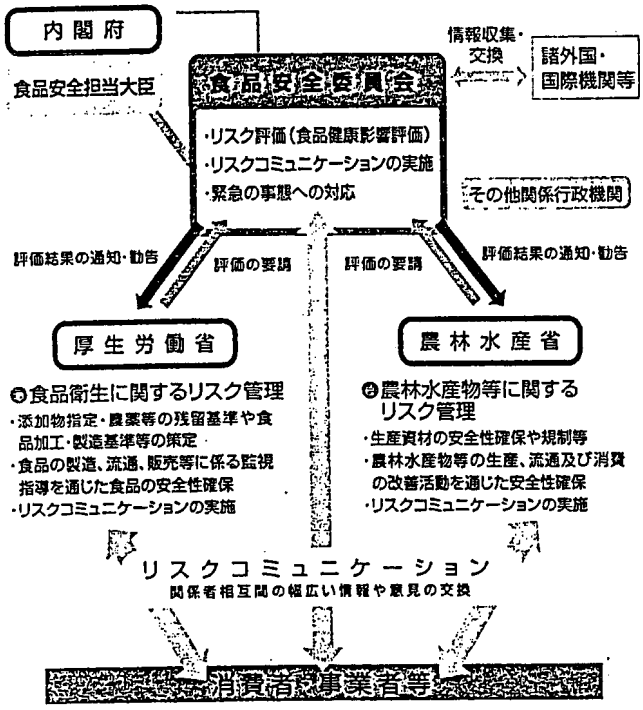

図 1　新たな食品安全行政（内閣府ほか, 2003）

(2) 農林水産省の対応

上に述べた政府の動きの中で、農林水産省も組織の大幅な改革に踏み切った。すなわちこれまでは、産業振興とリスク管理を同じ部局で行ってきたが、これでは生産者優先の政策が行われるおそれがあり、消費者の安全が軽視される可能性があるため、両者の組織を切り離すことになった。そこで新しく設けられたのが、消費者行政とリスク管理業務を独立して行う「消費・安全局」である。

消費・安全局では「食品安全危機管理官」や「消費者情報官」という職種が設けられたが、こ

れは私たちの言葉でいえば、「リスクマネジャー」とか「リスクコミュニケーター」に該当する。私たちはこのリスクコミュニケーターの養成を大臣官房から依頼され、早速そのプログラムの設計を開始し、トレーニングを実施することになった。今回の報告はその実践例である。

Ⅲ　リスクコミュニケーター研修の目的

上に述べたように、今回の研修目的は、農林水産省の政策修正とそれに伴う組織変革に対応して設けられたリスクコミュニケーターのプロを、省内で養成することである。これらのリスクコミュニケーターは、大きな食品事故が発生したとき、また新しい食品リスクが発生したときにプレスリリースを行ったり、住民との対話集会や説明会に出席する業務を担っている。つまり、リスク問題に関する農水省の「窓口」、時には「顔」となることになる。

したがって、リスクコミュニケーターといってもそれは単なる「おしゃべりのプロ」ではなく、そこで扱われる食品の安全についての総合的な知識、つまり食品リスクの測定や評価法、それにリスクマネジメントの手法についても専門的知識を持つ必要がある。また本人だけでは十分な知識を持てない場合には、それぞれの専門家を集めてチームを組織し、それを統括して発表の場に臨む技術を身につけて貰う必要がある。纏めていえば、研修の目的は次のようになる。

①信頼されるリスクコミュニケーションのコンテンツ作成の技術を身につけること
②併せてリスクコミュニケーションのプレゼンテーション技術を身につけること
③技術だけでなくリスクコミュニケーションの背後にある思想や価値観を理解すること
④総合的なリスク分析の中でリスクコミュニケーションの位置づけをすること
⑤リスクマネジメントのチームの中で専門家を纏めて使いこなす技術を身につけること
⑥フェアな情報提供を価値とする組織規範を確立すること

Ⅳ　研修の対象者

研修の対象者は年度によって異なるが、今回発表する 2002 年度の例では、農林水産省の各局や庁から集められた、課長補佐、主任調査官、企画官、室長クラスのメンバーを対象とした。人数は 12 人である（男 9 人、女 3 人）。人数はもう少し増やすことも可能であるが、研修担当スタッフ数との関係で、増やしすぎると研修の質が低下することになる。募集方法は上司からの指名で行われる場合と、希望者を応募させる場合と両方ある。

参加者の出身学部は農学部、獣医学部、法学部とさまざまであるが、それによってリスク分析の知識レベルにかなりの差があった。研修は、その点を考慮して設計を行った。

なお 2003 年度の研修では、係長、主任調査官、企画官など 16 人を対象とした。

Ⅴ　研修の担当スタッフ

研修担当者はそれぞれの研修によって異なるが、本報告の著者 6 名は、2002 年度の研修を担当したメンバーである。業務全体の統括は木下であるが、職務分担は下記の通りである。

プログラムの設計：2002 年度のプログラム設計は、木下を中心に吉野、山田、金川が行ったが、年度によっては農水省の政策研究所のスタッフ（西尾、佐藤）と共同で行うこともある。

実習：研修のうちリスクコミュニケーションの講義は木下が、チーム別の実習指導は吉野、金川が担当した。実習成果のフィードバックのうち、内容についての講評は主として木下と山田が、表現法についての講評は主として吉野と金川が行った。福井と竹西は、実習成果の採点、それに基づくデータの分析と表示を分担した。

ロジスティック業務：私たちのメンバー以外に、農水省の職員が数名、プレゼンテーション時のビデオ撮影、コンピュータネットワークの取りまとめ、書類のコピー、会場の設営など、ロジス

ティック業務を分担した。

Ⅵ. 研修に必要な資材

研修は依頼者から与えられた環境の中で行うのが原則であるが、依頼者との話し合いで望ましい環境を作ることができれば研修の成果は確実に向上する。必要最小限の資材は以下の通り。

パソコン：リスクコミュニケーションのコンテンツ作成のために必要であり、研修の受講生の数だけ用意しなければならない。プリンターは、受講生5人につき1台程度あれば間に合う。それ以外のコンピュータ関係の資材、たとえばFDやコネクターなどは、予備も含めて用意する必要がある。受講生以外のパソコンとして、研修スタッフが用いるものが数台必要であるが、これは普通、スタッフ側で用意する。統計や画像表示のソフトはインストールしておくこと。

撮影用ビデオとモニターテレビ：リスクコミュニケーションのプレゼンテーションの訓練には、ビデオの使用が必須である。撮影機は1グループに1台必要であるが、モニターテレビは全体で1台あればよい。

コピー機：教材や、受講生たちが作成した文書などを配布するために、コピー機は必須の道具である。ただし全体に1台あればよい。

Ⅶ 研修のスケジュール

研修のスケジュールは、研修レベルの高さと密度をどのあたりに置くか、どの程度の日数を確保できるか、受講生の数は何人かなどによってかなり異なる。その調整は、依頼者との話し合いの中で決定される。今回報告する研修では、丸2日と半日が、研修のために費やされた。

(1) 第1日目午前のスケジュール

9:00- .9:40　挨拶、研修生と講師の紹介、スケジュール説明

9:40-12:00　リスクコミュニケーション講義、参考資料紹介

(2) 第1日目午後のスケジュール

13:00-13:30　リスクコミュニケーション実習1（地震前兆現象に基づく地震予知）：目的説明

13:30-14:30　同実習：個人によるプレスリリース用原稿作成

14:30-15:00　同実習：グループ分けを行い、各グループごとにプレスリリース用原稿作成

15:00-15:15　コーヒーブレーク

15:15-15:35　同実習：グループごとに、プレスリリースのプレゼンテーション実習

15:35-17:30　ビデオ再生、プレスリリース用原稿のコンテンツについて、研修担当者による評価と改善点の示唆、同じくプレゼンテーションの評価と改善点の示唆

(3) 第2日目午前のスケジュール

9:30-10:00　クライシスコミュニケーション実習（O-157食中毒事件）：目的説明

10:00-11:15　同実習：グループごとにプレスリリース用原稿作成

11:15-12:00　プレスリリース用原稿のコンテンツについて、研修担当者による評価と改善点の示唆、受講生による相互評価

(4) 第2日目午後のスケジュール

13:00-13:30　リスクコミュニケーション実習2（かび毒の発生リスク）：目的説明

13:30-14:30　同実習：受講生を農水役とプレス役に分け、前者はグループごとにプレスリリース用原稿作成、後者はプレス側の立場に立った質問原稿の作成

14:30-14:50　コーヒーブレーク

14:50-15:10　同実習：プレスリリースのプレゼンテーション実習、及びプレス役による質問、

それをめぐる両者の議論、発表と質疑応答過程は全てビデオ撮影

15:10-16:10　ビデオ再生、プレスリリース用原稿のコンテンツについての研修担当者による評価と改善点の示唆、同じくプレゼンテーションの評価と改善点の示唆

16:10-17:10　農水役とプレス役による議論を基に改訂原稿を作成、最優秀グループに賞

17:10-17:30　最終講評

17:30-19:00　農水次官の出席のもとに修了証書授与、懇親会

(5) 第3日目午前のスケジュール

9:30-12:00　課長、審議官クラスのメンバーに対する講義と説明会

なお、ここに挙げたスケジュールは標準的なものであるが、年度によってこの日程を3日間連続で行うときもあれば、1週間おきに3日間にわたって行うときもある。前者は集中して行う分だけ密度が高く効率がよいが、受講生は宿題に追われてかなりのハードスケジュールとなる。後者はその逆で、研修が少し間延びするが、日程に余裕がある分だけ多めの宿題を出したり、それへの準備を可能にするという利点がある。また、全体の日程に余裕がないときは、スケジュールの一部を省略（通常は地震予知のリスクコミュニケーション）することもある。

Ⅷ　研修内容

(1) リスクコミュニケーションとクライシスコミュニケーションの講義

座学形式によるリスクコミュニケーションと、クライシスコミュニケーションの講義を行う。講義の内容は、次の内容を含む（木下, 1997)。

①リスク概念の定義、リスクとクライシスの違い、リスクとリスクの認知、両者のギャップ、リスク認知の構造とそれに影響する要因

②リスクコミュニケーションの定義、その背後にある思想や価値観

③効果的なリスクコミュニケーションの技法（コンテンツ）：基本的なプロセス、含まれるべき内容、内容の論理構成、表現法、コミュニカビリティ、コミュニケーション場面の運営法、コミュニケーションのリスク管理

④効果的なリスクコミュニケーションの技法（プレゼンテーション）：表情と声、人柄の表出、服装、言語表現法、設営される場所の設定と運営法、事前の準備法

⑤過去に行われた下手な広報の実例

⑥改善されたリスクコミュニケーションの実例

(2) リスクコミュニケーション実習1（地震前兆現象に基づく地震予知）

これはリスクコミュニケーションの入門として実施されるもので、問題に馴染んで貰うため、意識的に農水省の扱うトピックスから離れた実例を用意している。ここで扱う地震前兆現象はいわゆる宏観現象と呼ばれるものであり、伝統的な地震学の立場からはまだ認知されていない、その意味でリスクの高い情報である。このような不確定要素の多い情報、つまり情報開示に対する世間のニーズは高いが、といってまずい表現をすれば、世間に誤解を与えかねない情報をどのような形で表明するかが訓練の眼目となる。また個人で作成した文章が、グループ（3~5人）で討議することによってどの程度改善されるかについても訓練を行った。

(3) クライシスコミュニケーション実習（O-157食中毒事件）

この実習は、1996年に堺市で発生したO-157による食中毒事件を題材に用いた。この事件では、疫学的研究からは特定の業者が感染源であると推定されたが、肝心の業者の施設からは菌が発見されなかった。つまり、典型的な不確定状況下での広報のあり方の実例といえよう。この時

政府は、疫学的推定を重く見てプレスリリースを行ったが、その結果、カイワレ業者の生産に大きな打撃を与えることになり、政府広報のあり方をめぐって裁判が行われることになった。

実習では、当時、厚生省や農水省から発表されたプレスリリースの実物を題材に用い、現時点で見れば、その内容にどのような問題点があったかを発見することに訓練の中心をおいた。受講生によって修正された新しい文案の評価には、国民に信頼される情報開示という視点とともに、法律的に見て遺漏のない文言を作成するという視点が強調された。

また、当時に報道された新聞論調をデータベースからコピーし、その論調の中から世論の動きを読みとる訓練も併せて実施した。

(4) リスクコミュニケーション実習2（かび毒の発生リスク）

これは、架空状況下におけるリスクコミュニケーションの実習である。すなわち、小麦を主要生産物とする欧州の架空の国で、小麦にオクラトキシンによるかび毒が発生したという設定を行った。自国民の健康を守り、輸出先の国民から安心されるためには厳しいリスク管理をしなければならないが、厳しすぎると輸出が止まるというジレンマ状況下でのリスク管理である。

題材として、Joint FAO/WHO Committee on Food Additives が発表した毒性評価、Codex や EU の勧告、架空の国のモニタリング状況などのデータを宿題として提供し、それを基に農水役のものにはプレス発表用原稿を作成させる。その過程で、小さなリスク計算も経験させる。プレス役のものには、それに対して疑問を述べさせることになる。両者の役割を経験しながら、さらに文言を洗練されたものに向上させる訓練を行う。訓練の主眼は、上記のジレンマ状況下での、多元的な目配りによるバランスのとれた文言作成と、信頼されるプレゼン技術の習得にある。

Ⅸ　研修終了後の幹部職員に対する講義と説明会

研修対象の主体はいうまでもなく一般職員であるが（今回の例では中堅幹部)、研修を効果的にするためには、上級職のものも併せて訓練しておくことが極めて重要である。

というのは、新しく訓練を受けたものが職場に戻っても、職場は依然として旧態依然であることが多く、その中で研修生が張り切って仕事を進めようとすれば、周りのものから白い目で見られたり、嫌みをいわれたりすることがしばしばだからである。ことに研修生が仕事熱心で熱意に燃えているほど、このような傾向が顕著に現れる。結果として、研修生が職場から浮いたり落ち込んでしまう、時にはそれが原因で神経症に罹ることさえ少なくない。私たちはこれまで他の組織で、このような失敗を何度か経験してきた。

かかる状況を救う最大の道は、その職場の上司がサポートしてやることである。つまり上司が研修の目的を理解し、研修生が進めようとしている改革をサポートしてやれば、守旧派の抵抗は弱まり、研修生は非常に仕事がやりやすくなる。職場の規範を決定するのは、何といっても上司であるからである。

今回の研修では、最終日に部長、次長、課長クラスを対象に、講義と説明会を実施した。また研修終了日に修了証書を事務次官が直接手渡し、その後の懇親会にも出席して頂いた。このことが省内の規範形成を支えることになり、受講者にとっても大きな励ましとなった。

Ⅹ　引用文献

木下冨雄　1997　科学技術と人間の共生ーリスク・コミュニケーションの思想と技術　有福考岳（編著）環境としての自然・社会・文化　京都大学学術出版会　Pp.145-191.

内閣府食品安全委員会・厚生労働省・農林水産省　2003　食の安全と安心の確保に向けてーリスク分析の手法を導入し、安全な食品を食卓に届ける　時の動き（政府広報）, 10 月号, 12-19.

リスクコミュニケーター養成プログラムの設計

―農林水産省を例として：（2）研修の効果―

○ 吉野絹子（神戸学院大学）・木下冨雄（甲子園大学）・山田友紀子（農林水産省食品総合研究所）
金川智恵（甲子園大学）・福井 誠（甲子園大学）・竹西亜古（甲子園大学）

Design of training program for a skillful risk communicator ― A case of the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries : (2) Effects of the training

Kinuko Yoshino(Kobe Gakuin University), Tomio Kinoshita(Koshien University), Yukiko Yamada(Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries), Chie Kanagawa(Koshien University), Makoto Hukui(Koshien University), Ako Takenishi(Koshien University)

Abstract : This study aims to report the effects of a practice training for a skillful risk communicator. The practice training divides into two parts. One is how to write well a risk massage for press release, and the other is how to develop participants' ability for a presentation in public situation. The contents of the massage were estimated in seven scales ; correctness, clearness, openness, fairness, appropriateness, plainness and consistency. The presentations for press release were recorded by videotape, and were estimated by the trainers. After two months we asked the participants to evaluate their training experience, and most of them rated it highly.

Keyword : Risk communication, Training program, Risk massage for press release, Presentation

Ⅰ はじめに

本稿では、2002年度に農林水産省の職員を対象に行った、リスクコミュニケーター養成研修の効果について検討する。詳しくは木下ら（2003）を参照。

Ⅱ 方 法

研修は受講生へのリスクコミュニケーションの講義、プレスリリース用原稿作成及びプレゼンテーションの実習、さらに彼らの上司である幹部職員へのリスクコミュニケーションの講義と説明会からなっているが、ここでは12名の受講生に行った、プレスリリース用原稿作成とプレゼンテーションの実習に焦点をあてて報告する。実習は ①地震前兆現象に基づく地震予知（地震と略）＜リスクコミュニケーション＞、②O-157食中毒事件（O-157と略）＜クライシスコミュニケーション＞, ③かび毒の発生リスク（かび毒と略）＜リスクコミュニケーション＞の3つのテーマからなる。

実習は、グループごとにプレスリリース用原稿の作成とプレゼンテーション(ビデオ撮影)が行われ、その直後に研修担当者による評価と改善点の示唆が与えられるといった実践型研修である。加えて実習①では、事前に個人ごとにプレスリリース用原稿の作成が行われ、グループ原稿との比較がなされた。また実習②では、時間的制約によってプレゼンテーションが省略された。

（1）コンテンツの評価

個別及びグループで作成されたプレスリリース用原稿は、7つの評価基準による15項目で測定された。各項目は5段階の評定尺度で測定され、得点の高いほど評価が高いことを示している。なお（R）は逆転項目である。

① 正確さ（十分な知識に基づいた内容だった、説明には客観的根拠があった）
② 開示（不都合な情報を隠そうとした節がある(R)、悪い結果に関する予測も述べていた、欠点・問題点を率直に述べていた）
③ フェアネス（フェアな伝達を重視していた、偏りや決めつけがない表現だった）
④ 平易さ（専門用語が多かった(R)、かみ砕いた文体で分かりやすかった）
⑤ 穏当さ（人を傷つけそうな表現があった(R)、感情的な言葉を使っていた(R)）
⑥ 一貫性（論旨が常に一貫していた、誰が読んでも同じ読み方ができた）
⑦ 明確さ（内容を絞り込んでいた、曖昧な表現がなかった）

（2）プレゼンテーションの評価

プレゼンテーションの評価は、2つの評価基準で行われた。（R）は逆転項目である。

① 発声や姿勢（声が明瞭で力強かった、正々堂々と背筋を伸ばした姿勢だった、顔を上げ聴衆の視線を捉えていた、自信のなさそうな素振りをみせた(R)）
② 話し方（率直に誠実に話していた、簡潔で要領を得た話し方だった、緊張しすぎず自然体で話していた、押しつけがましい口調をしていた(R)、平明な話しぶりだった、丁寧で適切な言葉遣いだった）

Ⅲ 結果と考察

（1）コンテンツの結果

表1に研修担当者が行ったプレスリリースのコンテンツ評定を示す。上から順に『地震』の個人評定値とグループ評定値、『O-157』及び『かび毒』のグループ評定値である。

1) 個人評定値とグループ評定値の比較

『地震』では、個人による原稿作成の後、4グループ（A1,A2,B1,B2）に分かれて原稿を作成した。評定値の個人差及びグループ差は大きいものの、各グループの3人平均値とグループ評定値を比較すると、表1に示すように、すべてのグループにおいて大幅な向上が認められた。グループ原稿では、個人原稿で欠落していた多くの部分が補われ、また尺度では「フェアネス」「穏当さ」での改善が大きい。言葉遣いも適切に練り上げられて、全体として分かり易く信頼される文章が作成されている。グループで討議することは、知識を共有しあうばかりでなく、互いに自分の欠点に気づき相手の良さを吸収する機会でもあるという意味できわめて有効な手法といえよう。しかし、メンバー構成によっては上下関係等の集団圧力によって自己表現が妨げられたり、集団浅慮の生じる危険性があるので、グループ形成には十分注意すべきである（地震A1の例）。

2) クライシスコミュニケーションとリスクコミュニケーションの比較

クライシスがテーマの『O-157』と、リスクがテーマの『かび毒』を尺度の面から比較すると、『O-157』では『かび毒』に比べて「正確さ」「平易さ」で評価が高く、「穏当さ」で低い。「正確さ」に関するこのような違いは、『O-157』ではすでに発生している被害の内容や経緯から対象の情報を正確に得られ易いのに対して、まだ現実に被害が発生していない『かび毒』では、対象を正確に把握し今後を予測することが難しいことを示すものであろう。また今回取り上げた『かび毒』はかなり専門的な知識が必要であったため、用語や測定値を平易に述べることがさらに困難だったと思われる。

（2）プレゼンテーションの研修効果

1)本人の自覚

プレゼンテーションのビデオ再生は全受講生の前で行われた。まずプレゼンテーションを行った本人から、声が小さい、姿勢が悪い、原稿に目を落としたままで聴衆を見ていない、といった自分の映像を見て、「こんなに情けないプレゼンテーションをしていたのかとショックだった」という声があがった。多くの受講生にとってプレゼンテーションの経験は初めてであり、ビデオを通した自分の姿は

意外なものだったようである。演じている自分の主観的なイメージと、ビデオを通して客観的に見るそれとのずれが大きいことを理解できたことは大きな収穫であった。これは間主観性の問題でもあるが、この技能の獲得は、ビデオのモニターのほかに鏡の前でのリハーサルが有効であることを講師から教示した。

ともあれ今回のプレゼンテーション実習では、ビデオ再生の視聴を通して、自分の声や身体、話し方を意識化することの必要性を強調した。リスクコミュニケーションでは、ふつう、フェアな情報を提供することや互いに情報を共有しあうことが強調される。もちろんこのようなコンテンツが重要なことはいうまでもないが、実際のプレスリリースの場においては、情報をより良く伝えるためのプレゼンテーションの技術が重要な意味をもつ。うつむいて小声で発表する人は、自信がなく誠意に欠けると受け取られやすく、逆に落ち着いた自信のある態度で発表されると、その発表内容も信憑性のあるものとして受け取られやすいことは、これまでの研究からも実証されている。信頼されるリスクコミュニケーションを行うために、プレゼンテーションの技術向上はきわめて重要なのである。

（2）感情のコントロール

プレスリリースの場でもう一つ重要なことは、記者との質疑応答のやり取りである。記者の質問は返答に窮することを目論んでなされることもあるし、ときには意識的に悪意のあるものもある。発表のプレゼンテーションが十分行えたとしても、その後の質疑応答がしどろもどろでは、信頼感が一挙に低下する。このような場面では、発表者が質問に誠実に答えるとともに、挑発に乗らず、いかに自己の感情をコントロールできるかが鍵となる。今回の研修では意識的に挑発するような場面はなかったが、緊張が高まると無意識に身体や手足を揺すったり頭を掻いたりする動作がみられた。感情面ばかりではなく、自己の身体のコントロールも重要である。

今回の研修では全員にプレゼンテーションを実施する時間的余裕がなかったが、体験した受講生からは自分の身体を意識する契機となったと好評であった。また体験できなかった受講生から、是非体験したかったとの声も多かった。

Ⅳ　2ヶ月後の感想文にみる研修体験

研修2ヶ月後に、全員から研修体験の感想を求めた。今回の体験型実習は全体としてきわめて好評であった。具体的には「少人数での実践的研修で、集中してリスクコミュニケーションについて学ぶことができた」「時間的制約の中でどこまでフェアな情報を提供できるかという訓練になった」というように、研修それ自体の意義をあげる受講生が最も多い。さらに「自分が役所言葉に染まっていることがよく分かった」「個別評価やプレゼンテーションで指摘され、自分の欠点に気づいた」などと、本人が欠点を自覚する契機になったことを指摘する受講生も多かった。

実習方法に対しては「はじめに自分でやり、次にグループで智恵を出し合い、最後に他のグループと比較できるという3段階のやり方はとても効果的である」「即時に評点を行い講評していただいた点が特に良かった」などと実習形態や個別評価方法が好評だった。教材では「新聞のヘッドラインを時系列に並べる教材は非常に示唆に富んだものであった」と教材提示の斬新さを挙げたものもあった。取り上げたテーマでは、『O-157』は「過去の話題になった行政の対処方法を検証するという意味でとても大事だと思った」と多くの人がその意義を強調したが、『かび毒』については「今後直面する課題への対応について、大変勉強になった」「内容が高度すぎて時間が足りず消化できなかった」と賛否の意見が相半ばした。受講生の特性を考慮してテーマを設定することがきわめて重要だと思われる。

改善すべき点として最も多く挙げられたのは「もっと時間の余裕が欲しかった」であり、「数日泊まり込みたい」との希望もあった。また、専門性があまりにも強いことへのとまどいも指摘された。

Ⅴ　受講生の現在の所属先

12人の受講生のうち7人が、今年新たに設けられた「消費・安全局」に配属された。そのうちの数

名が初代の消費者情報官(リスクコミュニケーター)として任官したほか、残りの多くもリスク関連の職場に配置されたり、国内外に留学している。今回の研修が、このような部署で働く人々の、リスクコミュニケーションの知識や技能を高めるために大きな役割を果たしたことを示している。さらに今年度の研修終了後、各部署に散らばった受講生と研修担当者との同窓会が開かれた。研修の成果が現在の彼らの仕事に生きていること、研修を通じて受講生間の交流がスムーズになったとの情報がもたらされことは、研修に携わるわれわれにとっても大きな励みであった。

Ⅵ　引用文献

木下冨雄・吉野絹子・山田友紀子・金川智恵・福井 誠・竹西亜古 2003 リスクコミュニケーター養成プログラムの設計―農林水産省を例として：（1）設計思想とプログラムの内容―　日本リスク研究学会第 16 回研究発表会講演論文集第 16 巻

表1　コンテンツの評定

		尺度								
テーマ	個人名	正確さ	開示	フェアネス	平易さ	穏当さ	一貫性	明確さ	個人評定値	3 人平均値
地震(個人)	A1-1	3.5	3.7	4.5	2.5	2.0	3.5	5.0	3.5	2.9
	A1-2	1.5	1.0	2.0	4.0	1.5	3.5	2.5	2.3	
	A1-3	1.5	1.7	1.5	1.5	2.0	2.5	2.5	1.9	
	A2-1	5.0	3.7	5.0	3.0	4.0	3.5	4.5	4.1	3.9
	A2-2	4.0	4.7	5.0	4.5	5.0	5.0	4.5	4.7	
	A2-3	3.0	3.3	3.5	3.0	4.0	2.5	2.0	3.0	
	B1-1	3.0	3.7	3.5	3.5	1.5	3.5	3.0	3.1	3.6
	B1-2	3.5	4.7	3.5	4.0	1.5	4.5	5.0	3.8	
	B1-3	5.0	4.0	3.5	3.0	3.0	4.5	3.5	3.8	
	B2-1	5.0	3.3	3.5	4.0	4.0	3.5	5.0	4.0	3.5
	B2-2	2.5	4.0	3.0	2.5	1.0	5.0	4.0	3.1	
	B2-3	4.5	4.3	4.5	2.0	1.5	5.0	3.0	3.5	
	尺度平均値	3.5	3.5	3.6	3.1	2.6	3.9	3.7	3.4	3.5
	グループ名								グループ値	
地震(グループ)	A1	2.0	3.7	4.0	3.0	5.0	2.5	2.0	3.2	
	A2	5.0	3.7	5.0	4.5	5.0	4.5	5.0	4.7	
	B1	4.0	4.0	4.5	4.5	5.0	3.5	3.0	4.1	
	B2	4.0	4.3	4.5	4.5	5.0	3.0	3.0	4.0	
	グループ名								グループ値	
O-157(グループ)	A1	3.5	2.7	3.0	4.5	1.5	2.5	3.5	3.0	
	A2	5.0	2.3	5.0	5.0	3.0	4.5	4.0	4.1	
	B1	4.5	5.0	5.0	3.0	5.0	4.5	5.0	4.6	
	B2	4.0	4.0	3.0	2.5	2.0	5.0	3.5	3.4	
	グループ名								グループ値	
カビ毒(グループ)	A	4.0	3.0	3.0	1.5	3.5	3.0	5.0	3.3	
	B	2.0	4.0	3.0	3.0	4.5	3.5	5.0	3.6	